

令和4年7月23日(土)

信濃教育会 研究発表会 南信(オンライン開催)

佐伯胖所長 開会の挨拶

それでは、開会の挨拶をしたいと思います。おはようございます。本日は第74期研究員の第4回目の研究発表会です。本来は、飯田市立伊賀良小学校での開催でしたけれども、新型コロナウイルスの爆発的拡大のため、オンラインでの開催になりました。関係者の皆様、この突然の変更で、さぞ大変なことだったと思います。心から感謝したいと思います。開催にあたりまして、最近考えていることについて、少しお話ししたいと思います。

皆様は、信濃教育会会館の講堂の入り口に西田幾多郎の書が掲げられていることはご存じでしょうか。そこにはこう書かれています。「ものとなって考へ ものとなって行ふ」です。実はわたくしはかつて「イメージ化の知識と学習」という本(1978)で『擬人的認識論』というのを提唱したんですね。そこではものやことを理解するときは「自分の分身(コピト)」を対象のものやひと、ことの中に投入する。そして、対象の中に入り込んで、内側から外界を見渡したり、そこから感じられることを感じたり、そういうものの理解の仕方を提唱したんですが。これは、西田の言う「ものとなって考へ ものとなって行ふ」ということともとれるような話であります。ものに自分の分身を投入して、そのものになりきって、そこから感じることを、想像するというのは、信濃教育会の機関誌の「信濃教育」の1991年の4月号で『内側から見る』というエッセイでも書きました。そこでは湯飲みを理解するには湯飲みの外側から傍観者的に記述するというのではなくて、湯飲みそのものの内側に入って、湯飲みそのものがどのような変遷で、粘土から形作られ、それが湯飲みとなって、どのように使われるのかということに思いを馳せるという視点で語っているということなんですね。西田の「ものとなって考へ ものとなって行ふ」という文は『善の研究』という著書には出てきておりません。しかし、同書の中には、非常に似たような記述があります。そこでは、こう書かれています。「我々がものを知るということは、自己がものと一致するというに過ぎない」「花を見た時は自己が花となっているのである」と、こういうふうに言っているんですね。私の擬人的認識論ではですね、例えば湯飲みになるという場合は目の前にある湯飲みの内側に入って、その湯飲みがどのようにして作られ、どのようにして使われ、どのようにして経験していくのだろうか、ということに思いを馳せるんですね。けれども、実は西田の「ものとなって考へ ものとなって行ふ」というのは、実は「無の場」。「無」ですね。あらゆる概念、意味づけ、解釈をすべて取り払った状態の「無の場」から、絶対矛盾的自己同一性ということで、自らがあつ、よくなるとうとするということ、それを否定するということとの、何て言うかな、それを乗り越えて、ある在り様ということが、そうでない在り様ということを乗り越えて、そして現存、現在存在しているという、その実在に至るという、そういう認識なんですね。その実在を認識するときは、そのものの、今のある在り様というものを一旦否定することから始めるという知り方はですね、実はヨシタケシンスケという人の絵本『りんごかもしれない』、これが私はまさに西田の言う発想に非常に近いものだと思うんですね。ここでは主人公の僕は、ある日学校から帰ってくると、テーブルの上りんごがあつた。それを見て、僕は「でも、もしかしたら、これはりんごじゃないかもしれない」と呟いて「りんごとみえるけれども、本当はりんごじゃないかもしれない」というんです。そこで延々とりんごでない可能性をいろいろ探るんです。まあ、言い出すときりがないので、説

明しませんが。最終的には「やっぱり、もしかしたら、ふつうのりんごかもしれない」と呟いて、それをじーっと見つめて「お母さん、これ、食べていい」と尋ねて「どうぞ」と言われて食べると「あ、おいしいかもしれない」と呟いて終わるっていう話なんですね。この話は、目の前のりんごは、そうでないかもしれないという、いったん否定の場に身を置いて、そこで様々なものになりうるという無の状態から出発して、そして、様々な可能性を潜り抜けて現在、そうあるようにある。ということを実感するわけで、これは西田思想に非常に近い話だと思うわけです。私はこれを、西田精神で、教室の子どもを見るときも「その子は、本当は、その子でないかもしれない」と、いろいろな可能性の中にその子がその子であるということを、むしろ選んできている。ということを考えてみると、その子が今ある、そうになっているということ自身が非常に大切な、愛おしい、あるいは畏敬の念をもって見れるんじゃないかと思うんです。それが、寄り添うというまなざしではないかと思うんですね。本日の発表会で、研究員の先生方の子どもを見るというまなざしが、本当にその子になって考え、その子になって行うという西田の精神に即しているかについて、味わっていただければと思います。本日は、よろしくお願いします。